



週刊朝日MOOK『だから死ぬのは怖くない』
 2011. 10. 25発売
 ~65歳・余命わずかの末期がん男性患者
 憧れのプレスリーゆかりの地へ~
 トワーム小江戸病院に入院されていた高澤基さんの
 「最後の旅」が掲載されています



強く生きる

出発前の成田空港で、手前が高澤さん。奥の左端が坂本匡樹、その隣が高澤さんの妹の井手さん

旅先で診察されることも想定して、高澤さんの病状を英訳した「安全カルテ」を持っていった



65歳・余命わずかの
 末期がん男性患者
 憧れのプレスリーの地へ
 米メンフィス

死を目前に人は何をすべきなのか。そして周囲は何をしてあげられるのか。末期がんで余命いくばくもない男性は、ロッキの帝王をよまなく愛し、いすれゆかりの地を訪ねたいと夢見ていた。妹は、兄の夢をかなえてあげたいと思った。一刻とタイムリミットは迫っている。「最後の旅」が始まった。



ラフォーレ原宿の裏にあったプレスリー像の前に立つ高澤さん。40代のころ

グレースランドのプレスリーのお墓の前でポーズを取る高澤さん。笑みがこぼれた



高澤さんは、子どものころから集めていたプレスリー関係のコレクションを大切に保管していた

と、窓口で断られる。ならば看護士を連れて、個人旅行で行かないか。主治医の斎藤久医師に相談すると、日本旅行医学会に紹介された。8月2日、斎藤現事務理事に会って、話は一気に具体化する。斎藤医師は、高澤さんの容体を考えて、医師の同行が不可欠と判断。一緒に行ってくれる医師を探すと、福岡に住む坂本泰樹医師(57)から快諾を得られた。さらにもう一人、医学会から女性スタッフがボランティアで同行することになった。体への負担を考え、行程はゆったり組み、一方、出発はなるべく早いほうがいいと、8月23日に決まった。

万が一のときは 現地で火葬する

8月6日、井手さんが代理で申請していたパスポートを取り、車いすの高澤さんを介護タ



プレスリーのラストリゾート、リサ・マリアの車で坂本泰樹医師を介して



アメリカの伝統的な南部料理、をみずのから揚げと豆料理を、高澤さんも口にしました



グレースランド内には、いたるところにファンが作ったプレスリーの写真が飾られている

クシーで池袋まで乗せて出向き、無事、本人がパスポートを手にした。「このころは旅が本当に実現するかどうかが、半信半疑でした。実現しなかったら天国でプレスリーに会いに行つてねという思いで、兄の棺にパスポートを入れるつもりでした」

高澤さんの容体を考え、日米間の往復はビジネスクラスで移動することや、航空会社や現地でのホテル選びなど、スケジュールの詳細が固まってきた。万が一のことを考え、高澤さんが現地で亡くなった場合は火葬にするか、体内の血を抜きドライアイスで処置をしたうえで遺体を日本に運ぶか聞かれ、井手さんは現地で火葬を希望した。斎藤医師は、「この時点で、高澤さんの余命は2カ月程度でした」と振り返る。

旅が実現に向け、とんとんと拍子で動き出すにつれ、井手さん

の心は揺れた。無謀なことを始めてはダメとくれないか。兄は本当に喜んでくれるのか。でも、ここでしなければ後悔する。「毎日、明日の朝、先生に電話してキャンセルしよう、明日こそ電話しよう、そう思いながら、なかなか言えない。その繰り返しで、」

出が近づくと、高澤さん、容体が芳しくなくなってきたことが、不安に追い打ちをかけた。

8月20日、記者2人とカメラマンの計3人で、病院にいる高澤さんを初めて訪ねた。ベッドで横になっている高澤さんに、「(旅は)来しむすね」と実現して良かったか、「と、声をかける。

高澤さんは、こちらの呼びかけに時折笑み浮かべるものの、「誰が(行くの)?」「(もうちょっと)良くならないか」と会話がおぼつかない声は

かすれている。15分ほどの面会を終え、その場を去ろうとしたとき、高澤さんはわれわれを見送ると言いつつ立ち上がった。だが、一人ではなかなか体を起こせない。右肩あたりに痛みがあるように、痛みをかばうようにしながら時間をかけてなんと立ち上がったものの、前方より、斎藤医師によると、このときの高澤さんのがんは肺と骨にも転移していた。食道がさらに圧迫していた。そのため声がありません。また骨への転移のため、右肩から右腕にかけて痛みが出ていた。さらに脊椎骨にもがんが転移していたため、背骨にまがみが出て、立つことが難しくなっていた。いよいよ、正真正正、心配になった。われわれは、井手さんがそう感じたと感じた。

「何日前までは歩くことができていたのに、びつくりしました。すてショクです……」

出た。夫の8月21日、不安から、夫の仏壇の前で涙がこぼれた。

だが旅行前日の22日、不思議なことが起きた。

夜8時すぎ、自宅で飼っている16歳の雑種チルチルの容体が急におかしくなり、2時間半後に息を引き取ったのだ。旅に出る直前を見計らったかのような死。不吉に思われるが普通の感覚もありません。しかし、「チルチルはおじさんの代わりに逝つてんだよ」とい娘(3)の言葉に、それまでの不安は薄らいでいった。

「あ、これで無事に帰ってこれるな。無理抜きにそんな自信がわかんないです」

8月23日、空港に歩いてきた高澤さんは、プレスリーの顔が大きくプリントされたシャツを身に付けていた。左手首には安全折願のお守り、どちらも、

井手さんの知人がプレゼントしてくれたものだ。高澤さん一行4人を乗せた大韓航空0001便が米国内へ向け飛び立った。成田空港をたつてから、およそ10時間。

覚悟していたとはいえ、車いすに乗った余命わずかの患者の旅は、本人にも、同行者にも負担を伴った。

末期がん患者の高澤さん、妹の井手さん、坂本医師、日本旅行医学会の女性スタッフの4人は、まずロサンゼルス空港に着いた。

最初の事件は、空港で起きた。「トイレに行きたい」と言う高澤さんを、井手さんが男性トイレ内の車いす用のスペースに連れていった。

高澤さんを抱え、便座に座らせ、用を足させた。その後、便座から車いすに戻るとしたとき、高澤さんがパンスを崩し

死ぬ前に訪ねたい場所、あきらめないで

日本旅行医学会専務理事 篠塚規医師

世を去るまで住み続けた。敷地一帯は邸宅のほかにも、衣装やトロフィー、愛車などが展示されている博物館やプレスリー自

今、高澤さんの人生最後の旅を全面的にサポートしたが、医師や看護士らで動く日本旅行医学会(東京都渋谷区)だった。専務理事の篠塚規医師に話を聞いた。

末期がんの患者さんが長時間のフライトをこなす海外の旅は、今のようなケースは、過去にはほとんど例がないのではな

行き先として訪ねたい場所を、死ぬ前に訪ねてみたい、そう考える患者さんは世の中にたくさんいる。しかし、実現しませんが、(入院先の)医療関係者が積極的にサポートするケースも、患者さんの希望にこたえられませんが、(家族も)海外で倒れたらどうするの、と、止めてしまおうかな。

旅行会社のツアーに申し込もうとすると、(規定に)準ずるツアーは成立しませんでした。たまたま言葉に、体をくつらしたツアー客に病気の人がいると、全体の行程

身の前がつかないフライベイト・ジェットもある。ホテルからは車で15分ほどだ。目的地に着く管理が難しくなる。旅行計画が敬遠しがちなのは、致し方ない高さもある。

高澤さんのケースは、「本人に「行きたくない」というモチベーションがあり、それを支える家族がいて、そうしたい思いを理解し、積極的に後押しする医療関係者がいる」と実現しました。

同行した坂本医師は、病気になる前に高澤さんの旅行をお手伝いしたいという思いを、以前から持っていました。高校のときにアメリカに留学して、海外経験が豊富で、患者も増えるから、万が一に備えて健康状態を診るのにも手配など、さまざまな面で心強かったと思います。

日本旅行医学会には、必死な研究や認定した医師や看護士を、認定した「認定看護師」として認定する制度があり、坂本医師も認定医の認定リストには医学士としての認定医のリストは医学士

までの間に、プレスリーがこの年、生誕75周年であることを知らせる写真やポスターなどがあちこちに見えた。

ホームページ(※)に載せられ、英文の診断書を書いたり、高山病の予防薬を処方したり、さまざまな旅行業者の希望にこたえています。病気の患者がある人の旅には、以下の四つのポイントがあると言われています。

①費用のバリア
②移動のバリア
③心のバリア
④情報のバリア

亡くなる前に旅行に行きたいと思っても、具体的な情報や手段が知らないと、多くの方のためらい、あきらめになってしまうのが現状です。

海外でなくとも、国内の温泉旅行でも、小規模な、関係者の適切なサポートがあれば、そこそこのコストで旅行ができています。高澤さん一家の旅が広がること、本人や家族はもちろん、医療関係者や旅行業界の意識変えさせるきっかけになれば、と思います。

朝10時過ぎに着くと、暑い中、すでに観光客が集まりだしていた。入り口でチケットを買い、日本語のイヤホンガイドを借りた。敷地内はマイクパスで移動でき、車いすの高澤さんでも負担が少ない。

まずはエルズワグが住んだ邸宅。そこですが、気が分高揚したのだ。それまで口数が少なく、表情の変化も乏しかった高澤さんの様子が明らかに変わった。

「邸宅に飾つてあったプレスリーの元奥さんの写真を見て、「この人に池袋で会ったことがある。でもエッチはしなかった。」なんて言つたらいいですね。もともと天然系のところがあった。病気がなつてから時々おかしなことを言つてました(笑)」「井手さん」

プレスリーが家族と眠る墓も、多くの観光客でにぎわっていた。周囲には花や写真がたくさん飾られ、華やかな。



プレスリーの邸宅にあるリビングルームの前で高澤さん

一度もなかった。ロス行きの機内で、初めておむつ交換をした。「ヘルプミー!」って、近くにいた金髪のイケメン青年に声をかけた。兄はがんの影響で右肩あたりに痛みがあるので、「ペリ!ペイン!」とか、つたない英語でとにかく必死で、辛い、坂本先生もすぐ来てくれて大事に至りませんでした。これは大変な旅になるかと痛感しました(井手さん)

ずっと病院で世話になっていたので、井手さんが兄のおむつを取り換えたことは、これまで

「自分で歩ける車に聞いてました。でも車いすに乗せたり、下ろしたり、抱きかかえるのはコッパがあつて、すぐ慣れました」

坂本医師は、自ら「空飛ぶドクター」と名乗る。

もともと泌尿器科の専門医だったが、いまはフリーランスの医師として活動している。

旅が何より好きで、これまで40カ国近くを訪ねた。小柄で色黒で、いかにも活動的そうな

坂本医師は以前から、旅好きで語学が得意な自分の特性を生かしたいと考えていた。死ぬ前ならぬ「派手旅」として、死ぬ前にどうしても行きたい場所がある患者さんのお供をする。フリーとなったのも、いつでも旅に出られるようにしておくためだ。

痛みをコントロールすることで、末期がん患者が、一時的に小康状態を保つことはある。

「そんなとき主治医と密に連絡を取って、患者さん最後の旅行に連れて行ってあげたい。医師としては私の専門には限界がありますが、今回のように主治医と連携できれば問題はありません」(坂本医師)

滞り1日目の夜、メソフィス市内のホテルに着いた。坂本医師と井手さんと高澤さん、風呂に入ると、気持ちいい。高澤さんははうれそう。だが、そこで寝そべったままだが、何となく3人がかりでベッドへ移して寝かせたものの、温まっていた体はすつかり冷えてしまった。

「先が思いやられるハードな旅はスタートから(ヘトヘト)手帳にこう書き付け、井手さんがベッドに入るころには午前1時を過ぎている。翌日はもつぱら休養にあて、3日はいよいよ、グレースランド」へ向かう。

エルズワグプレスリーは、米国南部の町メソフィスにこそあって、スーパーセンターもなく、その地を離れなかつた。22歳で購入した家屋をグレースランドと名づけ、42歳でこの

幕の前でカメラを向けると、高澤さんは左手の親指を天に向けて、ポーズを決めてみせた(88号右下)。穏やかな笑顔だ。

きらびやかな衣装や壁一面にゴールドディスプレイが飾られた博物館では、よほど気分がいいのか、館内に流れるプレスリーの曲に合わせて、足でリズムを取りはじめた。

「ああ、調子取ってる、取ってる。さんさん聴いた曲どもねと思ひながら、うれしくなりました。でも状態が良かったのはこのときくらいまででした」

「奇跡よ、起きて」

暑い中を長時間見て回ったせいか、次第に高澤さんに疲れが見えはじめる。車いすから降りたり、ベンチへ移してあげると、寝転がろうとした。夕方、ホテルへ戻り、パジャマを着ておむつを換え、夕食を1時間か



南部料理の店では、陽気なスタッフが車いすの高澤さんを見るや、「写真を撮ろう」と声をかけてきた

「いまからすぐ病院に連れて来ますか」

「10日後のことだ。て、家医で、井手さんとその子や孫ら10人で故人を送った。棺には、今回の旅で撮った写真や着ていたTシャツ、プレスリーのCDを納めた。」

「いまからすぐ病院に連れて来ますか」

看護師から自宅に電話があったのは9月8日午後11時だった。看護師の声か、緊迫している。病室はさぞかわらなかつたのだろう。

「脈拍が口にならなかつた……と、看護師が叫ぶように言った。あわてて井手さんは、すぐに行きます」と言いつて電話を切った。

「いよいよダメかもしれないという予感があった。前日に見舞いに行く、高澤さんは肩で大きく息をして、呼びかけにもまったく反応しない。一緒に見舞いに行きたおはは、「もつてあつて、目か」

兄の最後の言葉 「また来年行こう」

「その可能性は確かにあるでしょう」と言われた後、「でも」と続けた。「大事なことは、死ぬ前の残り少ない貴重な時期をいかに有意義に過ごすかだと思います。何日本に帰って、井手さんが最後に兄と話をしたい会話は、高澤さんはエルヴィス三昧だった旅行に満足し、もうこの世に何の未練もなく、早く旅立つたのだと考えています」

「医師に連絡しなければいけない」と言いました。

魚つた坂本医師は、「彼は末期がん患者だが、少し緩れているだけだ。」「私は医師だ。何かあったときのために私が知っている。問題ない」と英語で興奮気味にまくしたて、何とか搭乗拒否にあわずにすんだ。

「あの時期が、旅に出るタイミングとして当にギリギリだったでしょうね」

今回の旅行が、高澤さんの体に負担をかけ、死期を早めたのではないかと、そうたずねると坂本医師は、

「その可能性は確かにあるでしょう」と言われた後、「でも」と続けた。「大事なことは、死ぬ前の残り少ない貴重な時期をいかに有意義に過ごすかだと思います。何日本に帰って、井手さんが最後に兄と話をしたい会話は、高澤さんはエルヴィス三昧だった旅行に満足し、もうこの世に何の未練もなく、早く旅立つたのだと考えています」



高澤さんと井手さん(左)が記念に撮った、プレスリーとの合成写真。1枚は高澤さんの棺に納め、もう1枚は井手さんの手元に大切に取ってある

「その可能性は確かにあるでしょう」と言われた後、「でも」と続けた。「大事なことは、死ぬ前の残り少ない貴重な時期をいかに有意義に過ごすかだと思います。何日本に帰って、井手さんが最後に兄と話をしたい会話は、高澤さんはエルヴィス三昧だった旅行に満足し、もうこの世に何の未練もなく、早く旅立つたのだと考えています」

「その可能性は確かにあるでしょう」と言われた後、「でも」と続けた。「大事なことは、死ぬ前の残り少ない貴重な時期をいかに有意義に過ごすかだと思います。何日本に帰って、井手さんが最後に兄と話をしたい会話は、高澤さんはエルヴィス三昧だった旅行に満足し、もうこの世に何の未練もなく、早く旅立つたのだと考えています」

「その可能性は確かにあるでしょう」と言われた後、「でも」と続けた。「大事なことは、死ぬ前の残り少ない貴重な時期をいかに有意義に過ごすかだと思います。何日本に帰って、井手さんが最後に兄と話をしたい会話は、高澤さんはエルヴィス三昧だった旅行に満足し、もうこの世に何の未練もなく、早く旅立つたのだと考えています」

「その可能性は確かにあるでしょう」と言われた後、「でも」と続けた。「大事なことは、死ぬ前の残り少ない貴重な時期をいかに有意義に過ごすかだと思います。何日本に帰って、井手さんが最後に兄と話をしたい会話は、高澤さんはエルヴィス三昧だった旅行に満足し、もうこの世に何の未練もなく、早く旅立つたのだと考えています」